

ワクワク留学体験記

Università degli Studi di Siena SIRSLab

南澤孝太（東京大学）



筆者は 2008 年 11 月始めから 12 月中旬までの 1 ヶ月間、シエナ大学の SIRSLab: Siena Robotics and System Laboratory に visiting student として滞在した。簡単であるが、イタリアでの研究生活について紹介したいと思う。

1. シエナ

イタリア・トスカーナ州、花の都とも呼ばれるルネッサンス文化の中心地フィレンツェから高速バスで南に 1 時間半、世界文化遺産にも指定されている古都シエナに到着する。周辺にはトスカーナ地方ののどかな風景が広がる中、城壁に囲まれた街が現れる。直径 3km ほどのシエナ中心部への入り口は 8 カ所の城門のみで、中に入るとシエナ色と呼ばれるレンガ色一色の、中世の時代から変わらない迷路のような街並みが広がる。街のいたるところにゴシック文化の影響が色濃く残っており、多くの教会や絵画を楽しめる観光都市でもある。街全体が歴史保存地区であるため近代的な外見の建物は皆無であり、大学の校舎も街中に点在する、昔は商家や修道院だったような建物を改修して使っている。筆者が訪問した Departmento of Information Engineering の校舎は元々は精神病院だったという、街の南端の門の脇に建つ古い建物であった。

2. SIRSLab での研究

SIRSLab は、モバイルロボティクス、ビジョンセン

シングのための画像処理技術、力触覚モデリング・レンダリングに関する研究を行っている。研究テーマを並べてみると筆者が所属している館研究室とよく似ているが、館研究室ではハードウェア開発が主力なのに対して、SIRSLab では理論構築とソフトウェア開発を中心に行っている。筆者が留学するきっかけとなったのは、2008 年 3 月にアメリカで行われた Haptic Symposium という学会である。開発したハプティックディスプレイをデモ展示していたところ、SIRSLab ディレクターの Domenico Prattichizzo 准教授に気に入っていただけ、何か一緒にやってみようとお誘いを受けた。その後 7 月にスペインで行われた Eurohaptics の際に再び会う機会があり、力触覚ディスプレイの新たな設計方針を構築するという研究テーマについて議論を交わし、visiting student としての訪問が決定した。その後は 1 ヶ月ほどの短い滞在期間でなるべく十分な成果を出せるよう、Skype でやり取りをしながら具体的な実験内容や滞在期間中のスケジュールについて計画を立て、11 月に訪問した際には比較的スムーズに研究をスタートすることができた。

研究室は 10 人ほどのポスドク、大学院生のメンバーがいるが、印象的だったのは、コーヒープレークやランチブレイクの時間（これが長いのだが）以外は皆ほとんど無言で研究に集中しているところである。そして 5 時に



トスカーナの田園風景



Duomo（大聖堂）



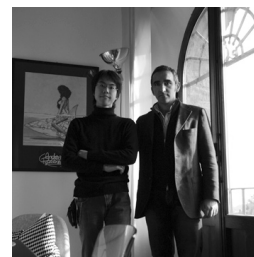
迷路のような石畳の道



シエナ大学 情報工学部



学生室（とてもきれいに整頓されている）



Prof.Prattichizzo のオフィスにて

なると帰宅し始め、6時には研究室が無人となる。日本では夜9時10時は普通だし、締切前だと土日に来たり泊まり込みしたりもしょっちゅうだよ、と言うと、信じられない！いつ休んでるんだ？と本気で心配される。というわけで研究室への滞在時間は日本にいる時よりも短かく、しかも休憩時間は長かったのだが、この、集中と休憩のリズムは心地よいもので、不思議と研究がはかどった。また、イタリア人の日常にはエスプレッソが欠かせなく、通りのあちこちにバルと呼ばれる立ち飲みのカフェがあり、1ユーロ以下でエスプレッソが飲める。朝食はバルでクロワッサンとエスプレッソ、研究の息抜きにも、食堂で昼ご飯を食べた後も仲間とバルでコーヒブレークといった具合に、1日3～5回はバルに行く。筆者も研究室の同年代の学生とのバルでのコーヒブレークが、日本の話題などの雑談から研究で必要な被験者のお願いまで、大切なコミュニケーションの場となっていた。

さて、コーヒブレークでの学生同士の雑談では、互いに不慣れな英語でなんとか楽しむことができたが、英語での研究のディスカッションは全く初めての経験で、自分の考えていることをなかなか表現できず苦戦した。筆者の拙い説明を聞いた Domenico 氏が、「僕の理解した範囲で説明し直してみるから、違うところがあったら言ってくれ」と、筆者の説明を再構築し、それに対して伝えきれなかった部分を補完していく、といった形で、徐々に自分の言葉で議論ができるようになってきた。1ヶ月ではスムーズなディスカッションには到底辿り着けなかったものの、これは非常に良い経験であった。そして最終的に、ハードウェアと理論、双方の強みを生かした成果を出すことができ、今後に関わる研究を行えたのは幸いである。

3. イタリアでの生活

イタリアの日常を垣間見れるものとして「ヨーロッパとイタリア」(<http://pya.cc/pyaimg/pimg.php?imgid=344>)という Flash ムービーがある。イタリアの不便さをおも

しろおかしく風刺したものであるが、実際に滞在してみると（もちろん誇張はあるものの）大体こんな感じ、といった印象であった。Visiting Student の書類の処理は、窓口を何カ所か回ったあげく結局最後まで終わらないままに滞在期間を終えてしまったし、食堂ではランチで30分待ちが普通。長いときには1時間近く待つ。交通機関は元々あまり来ない上にしょっちゅうストライキをしていたり、日本の事務機関や公共機関の優秀さを痛感する日々であったが、そういった不便さを気にせずにおおらかに過ごすのがシエナの人々の生活である。仕事は朝9時から夕方5時か6時まで。その後は商店街が家族連れで賑わい、7時を過ぎると商店は閉まってレストランやトラットリアが営業を始める。どの年代の人々も毎日の家族や友人との時間を何よりも大切にするとところは、平日は家に帰ったら寝るだけの筆者の生活とは異なる豊かさを感じた。

4. おわりに

帰路、成田空港へ降りた途端に、丁寧なアナウンスやコンビニ等の恩恵を受け、日本の便利さに感激し、再びどっぷりと浸かっている筆者であるが、イタリアへの留学を経て、研究に関しても、日常生活に関しても、少し視点を広げることができたかな、と思う。ヨーロッパへの留学は、言葉の壁は多少あるものの、基本的には英語で切り抜けられるし、日本ともアメリカとも異なる、味のある文化を体験できる。その中でもイタリアは、おいしい料理とコーヒー、ローマやルネッサンスの文化遺産など、たくさんの魅力が詰まっている。是非気軽に留学を楽しんでいただきたい。

著者略歴

南澤孝太

東京大学大学院情報理工学系研究科システム情報学専攻研究室博士課程在学中。日本学術振興会特別研究員DC1。修士(情報理工学)。